

University of Colorado School of Medicine,  
Children's Hospital Colorado

コロラド大学小児病院

高月 晋一

東邦大学医学部小児科学第1講座



現在私は、アメリカのコロラド州にあるコロラド大学小児病院で、主に臨床研究を中心に行っております。コロラドは、ロッキー山脈が横切り、平均標高が全米で最も高い州です。州都のデンバーは標高が約1マイル(約1600メートル)であるため、ワンマイル・ハイシティの愛称で呼ばれています。コロラド大学は、デンバーの東に位置するオーロラにあります。この州は標高が高いゆえに、気圧が低く、酸素濃度も低くなり、健常人でも経皮的酸素飽和度を測定すると、93%前後になることもあります。

私は、佐地教授のもとで主に小児の肺高血圧をテーマに研究をしてきました。今回、佐地教授からコロラド大学小児病院のDavid Dunbar Ivy教授のもとで2年の間、留学する機会を与えていただきました。Ivy教授は世界的に有名な小児の肺高血圧のエキスパートであり、この病院の循環器のチーフでもあります。この小児病院は、数多くの肺高血圧の患者が集まります。標高が高いほど酸素濃度が下がり、肺の血管が収縮するため、肺高血圧は重症化すると考えられています。つまり、コロラド州は肺高血圧患者が多く、かつ重症になるリスクが高い、というわけです。

2010年の夏に家族とともに渡米しました。初日に、新しいボスであるIvy教授の部屋に呼ばれ、Ivy教授が突然ホワイトボードに10個の研究テーマを書き出しました。書き終えると、「とりあえず、これらからやろうか!」と明るく言われました。少々面喰いしましたが、私のために色々考えてくれているのだな、と嬉しくなりました。

当初、この留学では、臨床研究と基礎研究を50%ずつの配分で考えておりました。ところが、基礎研究をはじめて半年ほどたったある日、基礎の上司にあたるドクターから、「君のやっている研究はすべて、君の論文ではなく、他の人が執筆するから」と突然言われました。同じ研究室の



小児病院の外観



左から practitioner nurse の Michelle, Dunbar Ivy 教授, 私 (Office にて)

メンバーからは同情されましたが、特に何のミスもしていないので、納得がいきませんでした。悩みに悩んで、Ivy教授に相談をすると、「今後は私と一緒に臨床研究に集中しよう」とあっさり言ってくれました。その一言で、気持ちが楽になり、その後の研究に打ち込むことができました。その時から1年半が経過しました。現在までに彼のもとで、7本の論文とテキストブックの執筆を終了することができました。

さて、小児病院には感染症科、血液科、膠原病科など多くの科が存在します。Ivy教授より、他の科のドクターを紹介され、川崎病の研究、鎌状赤血球症と肺高血圧の研究、膠原病による肺高血圧の研究などを行うこともできました。留学の後半からは自分からテーマを考え、デザインを

して、それをIvy教授らほかのドクターと検討し、与えられた課題だけでなく、新しい研究を生み出せるようになりました。

私がここまで来られたのは、Ivy教授の支えがあったからだ実感しています。Ivy教授は、人格者であり、私の家族も含めて大事にしてくれています。何か困ったらすぐに相談でき、明確な答えを出してくれて、必ず最後まで面倒を見てくれる方です。ちがう人種、ちがう言語、見知らぬ土地で頑張っていくのは、そんなに簡単なことはありません。アメリカで、いい上司に巡り合えたことは、何より代えがたい幸せなことと痛感しています。

最後に、この留学の機会を与えてくださった佐地教授、多くの関係者の方々に厚く御礼申し上げます。